

論文の内容の要旨

論文題目 初期カルナップの实在論と反实在論

氏名 長田 怜

本論文の主な目的は、初期カルナップが实在論 vs 反实在論という形而上学的テーマに対してどのような立場に立っていたかを明らかにすることにある。とりわけ、初期カルナップ哲学の「再構築プログラム」の集大成たる『世界の論理的構築』（以下『構築』）に着目し、そこに見出される实在論的ないし反实在論的立場を解明する。

第 I 部は、こうした解明の準備段階をなす。まず第 1 章では、カルナップの『構築』がどのような哲学的プログラムを提示しているかを、テキストに忠実に示す。とりわけ構造主義という立場の重要性を強調し、それがいかにプログラムを導いているかを確認する。

続く第 2 章では、このプログラムが歴史的にどのように評価されてきたかをまとめる。まず、解釈史としては、従来の経験主義的な読解から、ドイツの思想的文脈に即した読解へと移行していく流れを素描する。後者の読解はこの 20 年あまりの間にようやく主流となってきたものである。加えて、『構築』に対してこれまでどのような批判が加えられてきたかも確認する。

第 II 部は、第 I 部を礎石とし、『構築』のプログラムの有する实在論的あるいは反实在論的立場を正確に見定めていく。

第 3 章では、この点に関して従来の解釈がどのような立場をカルナップに帰してきたかを明らかにしたうえで、それとは異なる新たな解釈の可能性を示す。まず、3.1 節では分析哲学の伝統的な解釈を簡単に確認する。3.2 節以降は、第 I 部までの議論を踏まえた仕方で新たな解釈を模索する。3.2 節では、『構築』がオフィシャルに標榜している立場である中立主義の立場を検討する。特に、中立性が何と何の間の中立性であると考えられているかを詳細に検討し、そこに潜むアンバランスさを指摘する。3.3 節以降では、このアンバランスさの由来を辿ることによって、中立性が本当に保たれているのかを批判的に吟味する。3.3 節では、このアンバランスさの一因に、構成体系内にイミテーションとして再現された観念論のアイデアがあることを明らかにする。しかし、これは体系の内部にせいぜいイミテーションとして再現されたアイデアにすぎない。続く 3.4 節では、構成体系内部ではなく、構成体系をメタ的に考察する視点、すなわち構成理論の視点のうちに生かされている、観念論と实在論のアイデアを炙り出す。これらのアイデアがどう生かされているかという点の吟味こそが、『構築』の实在論と反实在論を見きわめる上でもっとも重要である。最後の 3.5 節では、3.4 節で明らかにした立場を現代的な観点から捉えなおす。最終的には、カルナップ自身が思っているほど『構築』は「中立的」ではないことが明らかになるだろう。その理由は、一方で観念論的な新カント派のアイデアを出発点にしつつも、他方では实在論の立場もすくいとろうとする中で、もともとの新カント派のアイデアがかなり変貌し、实在論に寄りすぎてしまっている点にある。

最後の第 4 章と第 5 章は、この新たな解釈をもとにして、現代哲学における实在論争のうちに初期カルナップの思想を正確に定位する。第 4 章では、『構築』のプログラムを受け継ぐグッドマンの『現象の構造』と『構築』を比較することを通じて、实在論をめぐる初期カルナップとグッドマンの立場の違いを明確に定め、グッドマンの有名な批判が両者の立場の違いを反映していることを明らかにする。まず、『現象の構造』がどういうプロジェクトかを見定めるいみも込めて、4.1 節と 4.2 節では、『構築』と比較した場合の『現象の構造』の特徴を明らかにしておく。『構築』と『現象の構造』の相違点は主に 4 つにまとめられるが、4.1 節ではそのうち 3 つの相違点を論じる。続く 4.2 節では残りの 1 つの相違点を論じる。最後の相違点が本論文の主題にとっ

でもっとも重要である。4.3節では、最後の相違点が实在論 vs 反实在論というテーマに関する立場の違いに起因するものであることを確認する。この作業を通じて、『現象の構造』と比して『構築』の立場がいかに強く实在論的かが明らかになるだろう。さらに、対象規定という課題の達成を体系構築に委ねる、という『構築』のプロジェクトの特異性も浮き彫りになる。また、類似の体系構築を行なっている、体系構築に求めている事柄がかなり異なるという事例がここに確認できるであろう。

第5章では、パトナムの形而上学的实在論批判と初期カルナップ哲学の関係を論じて、フリードマンが指摘した『構築』の問題点がどこに起因するかをはっきりさせる。それによって、第3章以降で提示してきた新たな解釈が『構築』の問題点の解明にとって非常に有益であることが理解されるはずである。特に、新たな解釈のもとでは、『構築』が形而上学的实在論のテーゼを含み、しかも、形而上学的实在論よりも深刻な困難を抱えていることが明らかになるであろう。

以上、第3章から第5章までの考察によって、現代的な实在論 vs 反实在論の論争のうちで『構築』がどういう立場をとると考えられるかが明らかになる。また、『構築』という1つの事例の検討を通じて、次のような点も明確になるはずである。すなわち、この論争に登場するさまざまな論点がどのようにして相互に結びついているか、という点や、体系構築において使用される道具立ての種類やその使用目的がこうした論点とどのように結びついているか、という点である。

最終章では、『構築』以降のカルナップの实在論上の立場を手短に検討する。この立場が『構築』とは根本的に異なり、中立主義の理想により近いものであることを確認することを通じて、『構築』の特異性と問題点をさらに明確にする。本論文で解明したような实在論が後期カルナップには見られないことから、それがいかなる経緯で失われたか、という点の考察が、後のカルナップ哲学の展開を追跡するうえで大きな意義をもちうることが示唆されるだろう。

一言でまとめれば、本論文は、形而上学批判の代表的書物と見なされている『構築』が、いかに形而上学的であるかを示す試みである。